平成　23 年　6 月 30 日

日本行動医学会
専門研究グループ（SIG）活動報告書

グループ名	情報リテラシと健康行動				
代表者氏名	齋藤　むら子	所属	早稲田大学理工学部未来医療政策研究所、HCTM リサーチセンタ	職 名	顧問 代表
連絡先	Tel : 03-5706-6526 Fax : 03-5706-6526　　e-mail : mrk34@waseda.jp				
１年間の活動内容 （具体的な活動内容とその成果）	平成２２年度ＳＩＧ活動報告（Mar.2011-June,2011） １．平成２２年度活動 本グループは、平成２３年度３月理事会において認証されまして現在３カ月ほど経過したところです。グループ活動としては、これから始動する段階です。そこで、今期活動報告としては、下記 2-1.に示す平成２２年度メンバ各位の主な研究報告を示すことします。 ２．平成２２年度活動成果 2-1. 学会誌掲載論文、専門図書掲載論文、著書など（あいうえお順） ―Saito,M.(2010) A scalable and viable strategy for managing organization: Typology of intervening into complex healthcare environment for enhancing its continual development　Gibbons,M.C. Bali,R. and Wickramasinghe,N. (2010) edited Perspectives of Knowledge Management in Urban Health, Springer, pp139-153 ―Saito,M.(2010) Amplifying resonance in organizational learning process: Knowledge sharing for overcoming cognitive barriers and for assuring positive action　Gibbons,M.C. Bali,R. and Wickramasinghe,N.(2010) edited Perspectives of Knowledge Management in Urban Health, Springer, pp155-170 ―西口宏美、辛島光彦(2010)介護予防サービス利用者の利用動機と主観的健康統制感について　日本人間工学会第５１回大会講演集 pp258-259 ―西口宏美(2010)　緊急通報システムに対する介護者の認知度とニーズに関する研究　第４５回日本経営システム学会全国研究発表大会予稿集 pp154-157 ―村上玄樹、鹿嶋小緒里、烏帽子田彰(2010)医療従事者に対する卒前教育中における安全教育に関する検討　日本人間工学会　関東支部会　予稿集 pp258-259 ―村上玄樹、久保田聡、綿貫貴大、田中将之、鹿嶋小緒里、烏帽子田彰、今中雄一(2010)医療職のキャリアと安全文化醸成、医療安全教育に関する検討　日本医療・病院管				

理学会誌 47(Supplement) p198

―林田賢史、村上玄樹、高橋裕子、辻一郎、今中雄一（2011）健康増進・地域医療・医療費適正化計画とデータ活用　生活習慣病の予防・治療システムの戦略的構築へ喫煙者と非喫煙者の生涯医療費　日本衛生学雑誌 66(2) pp337-338

―鷲田貴裕、辛島光彦(2011)　メンバのパ＾ソナリティを考慮した創造的会議におけるパフォーマンス向上に関する研究：外向性と内構成を対象として　　東海大学起用情報通信学部Vol.3,No.2, pp43-48

2-2. 意見交換会、シンポジウム等開催など

1) 福岡県に位置する某リハビリテイション病院における「病院経営ビジョンと地域医療連携の現状」と題するシンポジウムを、ＳＩＧ活動認証前、平成２２年７月１７日開催であるため、内容報告は省略する。

2) 主観的好みに影響されるワーキングメモリの神経機構、運転技能向上に伴う歓び、満足度の推定などの研究成果から、その場の感情状態はパフォマンスに影響を与えていること、人間行動は機械と異なり、Input-Output System としては十分説明できず、その場の制約やモデレータとしての感情、効力感などがパフォマンスを左右することなど、ゲストの示す検証例を中心に意見交換会を行った。ゲストとして理化学研究所理研 BSI トヨタ連携センタの川崎真弘氏をむかえ、東海大学情報理工学部経営システム工学科において平成２３年５月２０日に開催した。

3) 世界市場にプロジェクトベーズで活躍する企業人をゲストに招いて意見交換会を東海大学情報理工学部経営システム工学科において平成２３年６月１７日に開催した。デジタル情報システムを導入する過程においてプロジェクトメンバは効率やコストに配慮すると共に地域文化を周知しコミュニティ形成にも努める。情報基盤技術と関係組織調整が情報を迅速かつ有効に活用する上でかかせない。精度、コストを前提とする Data Sharing/Data Management と価値観、Raison d'etre を求める Knowledge Management などについて議論した。ゲストは NTT コミュニケイションズ株式会社法人事業本部システムエンジニアリング部坪井雅利氏。

３． SIG 活動「情報リテラシと健康行動」のねらい

人間の認知行為は、外界情報のフィードバック・プロセスとその情報の認知、解釈、判断、発信に至るフィードフォーワードプロセスからなる。最終判断はフィードフォーワードにおける外界情報認知(Appreciation of Information)とその場の状況認識(Contextual recognition) によって決定される。発信者は正しく受け止められたと思っても、受信者にとっては曖昧であったり、誤解される場合もある。多くの場合、情報フィードフォーワードプロセスのどこかに原因がある。情報発信者及び受信者の両立場に

	おける不十分な情報理解に起因する認知・行動ミス、また信頼性や互恵性の喪失、組織力の劣化など負の影響が問題視される。情報を正しく共有することは人間相互の信頼性を高める必須条件である。社会的絆（Social ties)、情報共有と協働関係（Knowledge sharing and collaboration）は自律的安全健康行動の形成を成功裏に導く。 人々が必要とする情報は、生活ニーズ、信念の継続に加えて、未来への希望がかなえられる社会環境に関するものである。現在のニーズ(needs)、過去から抱きつづける信念(brief)、未来への希望/価値創生(value)を実現できる組織環境への調整が自律的健康行動（Autopoietic / or Interactive health action）を育む。自律的健康行動の育成は、各主体の生活/経営目的に応じて、生存計画(Reactive planning)、最適計画(Proactive planning.)、そして 望む未来実現計画（Interactive planning.）などの戦略的行動目標を実践する過程において、関係者間の助け合い、分かち合い、組織学習における積極的話し合い、アイディアのすり合わせの中で発展的にすすめられることが、これまでの研究から検証されている。現在の問題解決や過去の失敗を繰り返さないための検証成果にととどまらず、望む未来への接近、或いは価値創生の過程における安全・健康行動形成に関わる方法論を提示することをねらいとする。 平成２３年度ＳＩＧ活動計画（July,2011-June-2012） １．平成２３年度活動テーマ 「知識共有型社会における情報解釈と安全・健康行動形成」を平成２３年度テーマとして、グループメンバ各位の専門領域におけるサブテーマをあげて各自研究を進める。各専門領域の研究成果を、本 SIG 活動のメインテーマのもとに総括し、自律的/主体的健康行動がしなやかに/強靭に発展する過程や仕組みにつての意見交換の場を用意する。 ２．平成２３年度活動内容 2-1. 第１８回日本行動医学会大会においてシンポジウム「知識共有型社会における情報解釈と安全・健康行動形成」（案）を用意する。 2-2. 「病院経営ビジョンと地域医療連携の現状」に関する第２回意見交換会を用意する。 平成２３年１２月１１日　　場所未定

	３． 期待される成果 産業や医療現場のプロジェクト活動において、充分、或いは適切に情報が共有されているだろうか。医療における専門家集団の情報共有のあり方がティーム医療の効率及び有効な行動形成に影響を与えている場合が多い。この影響の究明は医療需給システムの在り方や医療の質問題にとって重要な課題である。東日本大震災における政治家、保安院、そして東電、原子力委員会などにおける震災時原子炉状況に関する情報は共有されているもの思われたが、不透明なサブ・ポリティックスが事態を悪化させてしまった。情報の不十分な理解、誤解、隠蔽などによるあいまいな言動が信頼性や責任能力に疑問符を付ける結果を招いた。多様性、不確実性に富む社会活動における象徴的出来事であり、現実は深刻である。 本 SIG 活動における期待される成果としては、情報理解とパフォマンスをメディエイトするネットワーク力の検証例を示すこと、加えて、社会におけるさまざまな組織の参加者の安全・健康を保証する技術基盤整備及び組織環境調整（Organizational environment alignment）に関する研究成果を提示することにある。 ４． コラボレーションの場 レトリック(rhetoric) と現実(reality)のギャップに起因する多様性という断層(Diversity faultlines) を乗り越える方略に関する意見交換の場が求められている。現実社会には、既得権化する専門職者集団間における情報隠し(Information hoarding/or hiding)、また情報発信者と受信者間における情報格差(Information disparity)や誤解などが社会不安や行動ミスなど、安全・健康行動形成に関わる問題が多い。SIG「情報リテラシと健康行動」活動においては、知識共有型社会における情報理解が作業パフォマンスや安全・健康行動形成に及ぼす仕組みやプロセスを究明する観点から、アドホック・ミーティングやコラボレーションの場を提供する。
助成金の使途 （助成金を受けなかった場合は０円と記載。内訳は原則として，会場費・通信費・謝金等の費目に従って記載して下さい。）	助成額　　０　　千円 内訳（費目ごとに員数・単価・金額を記すこと）